

新たな戦略「DXの具現化」に向けた取組み ~建設部門DX推進部~

作業所に1人でも多くのDXのエバンジェリスト(伝道師)を増やす。

(株)長谷工コーポレーション  
建設部門DX推進部 推進チーム

チーフ 杉木 裕美



現在の業務

私は、現在、建設部門DX推進部に所属し、推進チームのチーフ(課長職)として業務に従事しています。当部は、NS計画の重点戦略である「DXの具現化」に向け、デジタル技術を導入・駆使することで①情報のデジタル化・一元化②リアルタイムに正確な情報を共有③設計着手から引き渡しまでの業務の見える化④社外との情報共有を実現し、生産性を向上させる事を目的として2020年に新設された部署です。

2025年3月期、BIM・DX・ITを活用した作業所業務の効率化・生産性向上20%目標達成に向け、首都圏120を超える作業所に直接足を運び、「BIM・DX・IT活用事例集」の啓蒙活動を実施し、アイテムの利活用推進に努めています。その他、部内のDX検討テーマの進捗管理や、クラウドストレージサービスの導入に向けたWGのリーダーとして、建設部門内外との調整やベンダーとの協創などにも携わっています。

これまでのキャリア

元々、私は担当職(一般職)として当社に入社しました。初めは建設部門の業務推進チーム(当時)に配属となり、作業所の経費関係、工事に関わる各種事務処理を中心に多数の作業所とメールや電話等でやり取りをしていく中で、作業所と本社の情報の一元化・伝達や共有の在り方について、もっと効率的な方法があるのではないかという課題感を持っていました。また、限定された業務に対する物足りなさも募り、入社から10年経ったタイミングで思い切って会社の職掌転換制度を利用し、総合職へキャリアアップしました。「自分のこれ迄の業務経験やそこで得た課題感、会社に貢献していきたい事」をまとめた「職務経歴書とこれからの提案」を当時

の人事担当の方に渡し、自分がどれ位通用するかというチャンスを買いました。そこから4年間建設IT推進部にて実務経験を積む中で、建設部門社



給スマートフォン約1,000台の運用・管理担当にもなった為、「MCPCモバイルシステム技術検定」の資格を取得しました。毎日「スマホの調子が悪い」「このアプリのログイン方法は?」といった問い合わせを受けているうちに、「どうせならスマホについて社内の誰よりも詳しくなろう」と思い取得しました。

そして、2020年にDX推進部が設立されて1年後の2021年に、思いがけず「チーフ」に任用されました。チーフ任用に加え「DX推進」というあまりに未知で大きなミッション。そのプレッシャーに自信喪失の日々でした。作業所経験もなければ建築の知識もない。ITの知識も中途半端な自分に何ができるのかと悩みもがき続けた先に、忘れかけていた職掌転換時に提案した「作業所と本社の情報一元化、伝達や共有の在り方」を進めたいという想いが再燃し、「やるしかない」と意識が変わっていきました。そこからは、実務でのDX知識の研鑽に加え、会社の自己学習支援制度「長谷工ビジネスカレッジ」を利用し、ITスキルや生産性向上に向けたビジネススキルの学習の機会を得て、日々自身のスキルに磨きをかけています。

会社風土や人事制度として、自分はこうしたいときちんと提案すれば経歴や立場は関係なく意見を聞いてもらえる、男性・女性関係なくその人間の適性をみてチャンスを与えるところは非常にモチベーションアップに繋がります。

今後の展望

DX推進というとデジタルを活用した最先端でトレンドな仕事だと思われがちですが、実際は、「人」を相手とした地道で思い通りに進まない仕事です。単にデジタル化することがDXではなく、デジタルを使って今までと仕事の仕方を変えていくことが大切だからです。人の仕事の習慣ややり方を変えるのは至難の業です。ですが、私はこれ迄の経験を経て、仕事の仕方がガラッと変わりました。つまり「変えよう」という当事者意識が大切であり作業所にはそのマインドは既に醸成されています。なぜならマンション施工とはとても手間や労力がかかる仕事であり、建設部門にはDXという言葉が生まれるはるか前から効率よく仕事をしようという伝統の改善力があるからです。

さらに、私達も自部門のDX目標だけにフォーカスする訳ではありません。長谷工グループは、設計/建設/技術推進部門、そして協力会社の方々と四位一体で品質活動に取り組んでおり、DX推進も同様に四位一体で取り組んでおります。その中で、一人でも多くのDX推進を後押しするエバンジェリスト(伝道師)を増やし、他社では決して真似できない四位一体の総力をもって生産性20%向上、NS計画目標達成に貢献していきたいと強く思っています。

新たな戦略「DXの具現化」に向けた取組み ~(株)長谷工アネシス 価値創生部門 FIT開発部~

臆せず失敗を恐れない風土の中で、自分がやるべきこと、またクイックウィンの積み重ねにひたすら取り組んでいます。

(株)長谷工アネシス  
価値創生部門 FIT\*開発部

チーフスタッフ 桃原 玲奈

\*FIT: Future Innovation Transformation



既存サービスや業務内容を良い意味で今一度疑い、もっと改善点を発見できるように努めています。

(株)長谷工アネシス  
価値創生部門 FIT開発部

小野寺 昭

(株)長谷工アネシス価値創生部門はNS計画の重点戦略である「DXの具現化」に向け、データ・デジタル技術やAI・IoT等先進的技術を積極活用し、既存業務の改革や新たな事業モデルの創生・実証に取り組んでいる、謂わば長谷工グループの成長戦略を牽引する部署です。

その中で私達が所属するFIT開発部は、グループ各社から横断的に中堅・若手社員が集まり組織され、技術やシーズありきではなく、ニーズを起点に顧客価値を重視した新規事業開発に取り組んでいます。

桃原 現在新規事業開発とは別に私が担う大きな役割の一つが「DXアカデミー」の運営です。事務局のリーダーとして企画・実施した2023年度の「DXアカデミー第三弾」では、各社・各部門のDX施策を加速し、定量的な成果を得るべく、組織を牽引する部長職



を対象にしました。具体的には、IT、ICTの要素技術を学ぶ第一弾・第二弾での講座とは違い、組織的にDX施策を推進する上で、DXアイデアの評価手法とマネジメント層が果たすべき役割に絞ったカリキュラムとしました。実践演習では、DX技術を活用しながら自部門における課題を解決するアイデアに加え、収益インパクトとその根拠、実現難易度、推進する上での課題など詳細にアウトプットしてもらいました。結果として、業務フローや顧客管理、営業ナレッジの可視化等に関連した様々なアイデアが提案されました。今後はそれらを価値創生部門、グループDX推進委員会で分析し、実現可否の精査や優先順位付けを行っていきます。これらをどう昇華させていくかという重大な責務は自覚しつつ、約700名もの参加者からの様々なアイデアなど、相応の成果を伴って「DXアカデミー第三弾」をやりきれたことは、私にとって大きなやりがい・達成感となりました。

価値創生部門は、失敗を恐れない風土で、且つ企画から実行までの個人裁量も広く、とてもモチベーションが上がりやすい環境です。仮に失敗したとしてもそれが次の財産になる部署でもあります。これからも臆することなく、自分がやるべきこと、価値創生やDXにとって重要になるクイックウィン(小さな成功体験)を積み重ねていきたいと思っています。

小野寺 現在私は主にLIM(living information Modeling=建物に設置されたセンサーなどから収集される「暮らし情報」を活用する概念)関連のテーマに携わっています。私は2023年4月に会社の公募制度でFIT開発部へ異動しました。それまでは、長谷工グループにてマンション管理事業を担う(株)長谷工コミュニティの技術部門で、施設管理や大規模修繕のコンサルタント業務等に従事していました。NS計画内で「既存ビジネスの生産性の抜本的な改革」をしていく方針が掲げられ、これを自分事として強く意識するようになりました。またそれは、自社の管理事業のDX推進へ積極的に参加したいという想いともなり、業務改善・改革アイデアの積極的な提言などを続けていました。グループ各社から選抜された80名を対象としたDXアカデミー第二弾への参加も叶い、その中で、先端技術の応用による新たなサービス展開、技術開発に着目して、新築・管理・改修まで幅広く活用ができるような提案を経営トップへプレゼンしました。この学びを今後のグループ事業に活かしていきたいと益々思うようになり、DX人材の公募へ応募し、異動が叶いました。



業務上求められるスキルは、まだまだ足りないと思撃に自覚した上で、社内外問わず多くの関係者から学ぶようにしています。また、これまでの業務内容や他の関連部門のサービスを、良い意味

で今一度疑ってみたり、もっと改善が出来るのではと考える習慣づけを心掛けています。

異動したばかりなので正直不安な面はあるものの、「長谷工グループのサービスや技術が、安全安心で快適な住まい環境に繋がる」ということが、やりがい・働きがいとなって今の私を支えています。

価値創生部門では、様々なソリューションの試行・実証に取り組みながら、そこに住もう人への新たな価値の提供を目指しています。また、多様な人材が揃っているのも、部門内でのコミュニケーションを図ることで、相乗効果を上げ、新たなサービスを創出していると思っています。私自身、さらなるスキルアップに努め、そこへ大きく貢献できるように頑張っていきたいと考えています。